

1. はじめに

日本語では意志を表す場合、いわゆる助動詞の「う・よう」を用いる表現が一般的である。

- (1) 私が(は) 行こう。
- (2) お荷物を お持ちしましょう。

それ以外にも、「～するつもり／考え／所存 だ」などの修飾節を伴う名詞・形式名詞を断定辞で受けた説明的な表現や、「行く」「お持ちします」などの、動詞性述語の無標形(益岡1991 p.55)(以下、本稿では「～する」で表す)を用いて意志を表す方法もある。

一方、中国語では、意志や願望を表す能願動詞「要[yao]」や、意志、勧誘、命令などを表す「吧[ba]」などがある。

現代日本語の「つもり」は、意志専用形式であるが、上述のその他の形式である助動詞「う・よう(以下、本稿では「う」で表す)」や、修飾節プラス名詞などは、意志だけを表すわけではない。「う」は勧誘や命令を、修飾節プラス名詞は、伴う修飾節の内容により様々な意味を表す。複数の用法の中で、時に意志の意味をも担うことがあるというものである。この点は、中国語の諸形式の場合についても同様で、「要」は「～しなければならない」などの意味を、「吧」は断定を避け、推測による判断であることなどを示す。

また、これらの諸形式は、日本語の場合も中国語の場合も、統語的なカテゴリーとしては、互いに異なっているものである。

本稿では、意志表現を、これらの形式を含めて、広い意味用法のカテゴリーとしてとらえることにする。そして、日本語の上述の三種類の意志表現形式を軸に、先行研究によって明らかにされたそれらの体系性に基づき、対応する中国語の表現形式について、類似の体系性が見られるかどうか考察を試みる。

2. 調査方法

まず日本語の意志表現について、森山1990を主として、仁田1991、益岡1991などをもとにそれらの用法を整理した。それに基づいて調査項目を定め、本稿末に添えた調

査票を作成した。話者には、東京都立大学大学院生の朱継征氏（北京市出身）、張昌玉氏（吉林省出身）のお二人に協力して頂き、質問の意図を説明しながら、調査中に、更に疑問な点を直接確認する方法をとった。以下、本稿で資料とした中国語のデータは、このお二人の内省である。各調査項目の意図は以下の通りである。

「調査票項目Ⅰ」

まず最初に、中国語には意志表現としてどのようなものが存在するのかをお聞きした。その際、話者の方に日本語で、それらの中国語の形式の持つおおまかな意味を説明して頂き、願望を表す「想」を用いた表現は対象外とした。そして、得られた中国語の表現に動作主体の人称制限が見られるかどうかを確認した。

「調査票項目Ⅱ」

この項目では、中国語の意志表現と過去時制との関係を見た。日本語の場合には、過去の表現をとり得るか否かという点が、いわゆる一次的モダリティか二次的モダリティかという分類を行う際の、重要な弁別の特徴となっているが、もし、中国語の意志表現にも、過去の表現になり得るものとなり得ないものがあるならば、調査項目Ⅰの人称制限についての結果とも突き合わせてみて、日本語の場合の二次的モダリティと一次的モダリティの区別に相当するものがあると考えられるのではないか、という仮説を立てた。一次的モダリティと二次的モダリティについては次章で詳述する。

「調査票項目Ⅲ、Ⅳ」

この項目では、発話の際に聞き手の有無によって使い分けがあるかどうかをお聞きした。日本語の場合、聞き手が存在する会話の場面か、聞き手のいない独白や心内発話かによって、意志表現には使い分けがあることが知られている（森山1990）。詳しくは次章で述べるが、そのような使い分けが中国語にも見られるかどうかを確認した。

「調査票項目Ⅴ」

この項目では、発話の場面差によって意志表現の形式の使い分けが見られるかどうかをお聞きした。具体的な場面設定については、次章を参照していただきたい。

3. 分析

3. 1. 一次的モダリティと二次的モダリティ

まず、現代日本語の「う」、「～するつもりだ」、「～する」の、意志を表す三種類の形式のあいだには人称による使い分けがあることが、諸々の先行研究によって明らかにされている。

すなわち、一人称である「私」（話者）が主体の場合には、意志表現としてどの形

式も用いることができるが、

- (3) 私が(は) 行こう。(=(1))
- (4) 私が 行くつもりだ。
- (5) 私が 行く。

二人称である「あなた」(聞き手)が主体の場合には、意志表現としては、どの形式も用いることができない。

- (6) *あなたが 行こう。
- (7) *あなたが 行くつもりだ。
- (8) *あなたが 行く。

聞き手の意志を、話し手があたかも透視しているかのように述べるのは、通常は不自然だからである。

しかし、「私」(話者)を動作主体に組み入れて、聞き手に働きかける(勧誘)場合には、「う」のみ用いられる。

- (9) (あなたも) 行きましょう。
- (10) *(あなたも) 行くつもりだ。
- (11) *(あなたも) 行く。

「う」には、命令用法があるので、そのような意味の場合には、主体が二人称のみであっても成り立つ。

また、動作主体が第三人称の場合には、意志表現としては「う」、「～する」とも用いることができず、「～するつもりだ」が用いられる。

- (12) *彼が 行こう。(推量としてなら文として成立する可能性有り。)
- (13) 彼が 行くつもりだ。
- (14) *彼が 行く。(単なる予定や事実など、意志以外のコンテキストでは可能。)

次に、時制との関わりについては、次のようなことが明らかにされている。

まず、助動詞「う」は、形式自体に過去形が存在せず、基本的に、発話時現在の意志しか表すことができない。

- (15) よし 行こう。(発話時現在の意志)
- (16) *あの時 行こう(た?)

それに対して、「～するつもりだ」は、形式として過去時制をとることができる。

- (17) 私は 行くつもりだ。(発話時現在の意志)
- (18) あの時 私は 行くつもりだった。(過去における意志)

また、「～する」は、必然的に、現在形で、しかも意志動詞である場合でしか意志

表現にはなりえない。過去形にすれば、単なる過去の事実の叙述となってしまう。

以上のことから、日本語では「う・よう」を、話し手の意志のみを、現在に限って表すことができる一次的モダリティ（益岡1991）、「～するつもり／考え／所存だ」などの形式を、話し手、第三者のどちらの意志をも表すことができ、更に過去についても叙述できる二次的モダリティ（同上）と位置づけることができる。そして、動詞の無標形は、話し手（第一人称）を動作主体として、更に発話時現在の場合という限られた条件下でのみ、意志表現として機能することができる、ということになる。

以下、それに対する中国語について、調査票の質問項目ごとに順を追って述べていくことにする。

3. 2. 調査結果と考察

3. 2. 1. 意志表現と人称制限

まず、日本語の「う・よう」に対応する中国語の形式としては「吧〔ba〕」がある。

[第一人称]

(19) 我去吧。

(私が行こう。)

これは、第一人称では意志を表し、一・二人称では勧誘、二人称では軽い命令、三人称では推量を表す。

[第一・二人称]

(20) 一起去吧。

(一緒に行こう。)

(21) 我们去吧。

(咱们)

(私たちは行きましょう。)

(21)は、聞き手に呼びかけた場合には「我们」の中に聞き手を含み、勧誘の意となるが、「我们」の中に聞き手を含まずに、自分達（複数）の意図を、第三者である聞き手に通知する、といった意味になることもある。

[第二人称]

(22) 你去吧。

(行きなさい。)

[第三人称]

(23) 他（可能）去吧。

(彼は(たぶん)行くでしょう。)

次に「～するつもり／考え／所存だ」に対応する形式に「要〔yao〕」、「打算〔dasuan〕」、「准备〔zhunbei〕」がある。これは一人称、三人称どちらにもつくことが出来る。

[第一人称]

(24) 我要去。

(私は行こうと思う。)

(25) 我打算去。

(私は行くつもりだ。)

(26) 我准备去。]

(私は行く予定だ。)

[第三人称]

(27) 他要去。

(彼は行こうと思う。)

(28) 他打算去。

(彼は行くつもりだ。)

(29) 他准备去。

(彼は行く予定だ。)

その他に、日本語と同様、動詞そのままが一人称現在で用いられた場合、及び「～しなければならない」、「～すべきだ」などの、義務や当為を表す形式に対応するもの(「得〔dei〕」「必須〔bi xu〕」(以上「～しなければならない」)、「应该〔ying gai〕」(～すべきだ))も、一人称で用いられ、現在、制止する相手をふりきって何かをする場合などには、やはり意志の意味をおびることになる。

(30) 我去。

(私が(は)行く。)

(31) 我得去。

(私は行かなければならない。)

(32) 我必须去。

(私は行かなくてはだめだ。)

(33) 我应该去。

(私は行くべきだ。)

「得」を用いた(31)は最も消極的な意志表明で、「自分は行きたくないが、(仕方が

ないので)行かない訳にはいかないだろう。」というニュアンスになる。それに対して、「必須」を用いた(32)は、強い義務を表し、「(強制的に)行かなくてはだめだ。」というニュアンスを持つ。意志というよりは、有無を言う余地すら残っていないというものである(注1)。また、「应该」を用いた(33)は、例えば、母親が病気であるなどの事情から、子供である自分としては、看病しに行かなくてはならないというような、倫理的な理由から(注2)、そうすべきだという意味になる。

以上、中国語には、日本語にほぼ対応する表現が存在すると言えそうである。

3. 2. 2. 過去時制との共起

調査票項目Iで得られた中国語の各表現に付いて、過去表現と共起出来るかどうかを調査した。結果は、日本語と同様、調査票項目Iで、第一人称、第三人称のどちらにも用いることができると判明した「要」、「打算」、「准备」の三形式のみが、過去の表現と共起する。つまり、これらの形式が二次的モダリティに相当しているのである。

(34) 我要去来着。

(私は行こうとしていた。)

(35) 我打算去来着。

(私は行くつもりだった。)

(36) 我准备去来着。

(私は行く予定だった。)

これらはすべて、「我(私)」を「他(彼)」に置き換えられる。また「来着」がなくても、文頭に「昨日」などの過去を表す副詞をつければ、過去における意志を表すことができる。

3. 2. 3. 聞き手の有無

日本語の意志表現には、聞き手の有無によって使い分けがある。すなわち、「う・よう」形式は、

(37) 私は 行こう と思った。

(38) やっぱり 行こうっと。

のように、心内発話や独白としても用いられるが、

(39) *私は 行くつもりだ と思った。

(40) *私は 行く と思った。

(41) *私は 行くつもりだつと。

(42) *私は 行くつと。

のように、「～するつもりだ」、「～する」は、意志を表す際には必ず聞き手がいなければならない、心内発話や独白としては成立しない。

このような差が見られるかどうかを調べるために、聞き手のいない場合として「～と思う／思った」、聞き手のいる場合として「～と言う／言った」という形式を付加してそれぞれの表現が成り立つかどうかを見た。

その結果、中国語では得られたすべての形式で、心内発話形式とは共起しないことがわかった。

まず、日本語の「う・よう」に対応すると予想される「吧」は、

(43) 我想我去吧。

(私が思うには、たぶん私が行くでしょう。(推量))

上の例文のように「思う」を表す「想」を用いた文の中では、推量の意味を表すことになり、意志表現にはならない。

また、中国語の「要」「打算」には、既に「～と思う」の意味が含まれており、「思う」を表す「想」とは共起しない。

(44) *我想我要去。

(私は(私が)行こうと思った。(意志))

(45) *我想我打算去。

(私は(私が)行くつもりだと思った。)

(46) *我想我准备去。

(私は(私が)行く予定だと思った。)

更に、動詞の無標形も不可能である。

(47) *我想我去。

(私は(私が)行くと思った。)

このことの裏返しとして、逆に、聞き手を想定した発話なら、どの形式も自然に用いる事ができる。

(48) 我說我去吧。

(私は(私が)行こうと言った。)

以下、他の例も同様のため、省略する。

日本語と中国語で違いが見られるのは、日本語の助動詞「う・よう」が、心内発話に用いる事が出来るのに対し、ほぼそれに対応する中国語の「吧」は、心内発話には

意志表現としては用いられない点である。

日本語の「う・よう」も、古くは意志と共に推量の意味をも担っていた。しかし、現代語では、形容詞につく場合などに（「よかろう」など）、やや文語的な表現として、直接活用語について推量を表す用法が残ってはいるものの、推量表現としては、専ら「だろう（「だ」の活用形＋「う」）」にその役割を分化させている。そのため、「思う」のように思考を表す動詞が主節に現れても、主節動詞に影響されることなく、意志の意味で用いることが出来るのである。

しかし、中国語の「吧」には、意志と推量を明確に分けて表す指標がないのではないだろうか。つまり、中世の日本語の「う・よう」の持っていた、推量と意志が融合していたのと類似の性質を、中国語の「吧」は、持っている可能性がある。もともと、意志と推量は、意味的に連続した概念である。この点については、中国語の推量表現との考察も行う必要があり、今後の課題とすべき点であるが、「吧」が、主節動詞の種類により、推量の意味としてしか解釈出来なくなる点を考える上での可能性として考えられる。

また、朱継征氏、及び張昌玉氏によると、意志表現に限らず、中国語にはひとりごとを表すような言語形式が少ないというコメントも得られた。この点も、興味深い文化的な背景の違いとして考慮すべきかと思われる。

3. 2. 4. 発話の場面差

森山1990によると、日本語では、談話の内部での意志形成・決定の場合で、相手もその形成に参加する場合には「う・よう」形式、談話に関係なく意志を通告する場合には「～するつもりだ」形式、談話の内部で形成された意志であっても、既に決定済みのこととして表す場合には「～する」形式を用いるという違いがある。このような点について、中国語ではどのようになっているのであろうか。

まず、設問（1）では、相手（聞き手）との談話内で意志を形成する場合を想定した。しかし、ここでは聞き手と共同で作業を行う場面であるため、勧誘的な意味合いも入ってしまっている。日本語では、このような場合、「う・よう」形式しか用いられない。

（49） 赤い花を 植えよう。

そして中国語でも「吧」を用いた表現しかできない。

（49）' 种红花吧。

設問（２）では、やはり談話内の意志形成のケースであるが、ここでは、ワープロを買う行為者はA（話し手）のみであり、B（聞き手）は行為者に含まれない。このような場合、やはり日本語では「う・よう」、中国語では「吧」を用いる。

(50) こちらの方を 買おう。

(50)' 买这台吧。

やや唐突で、こなれない感じはするが、「～する」形式も用いることができるだろう。

(51) ? こちらの方を 買う。

(51)' ? 买这台。

この点でも、日本語と中国語は一致している。

設問（３）では、やはり談話の内部であるが、意志決定にさほど聞き手の関与がない場合を想定した。そして次の設問（４）と比較して、それほど改まった場面ではないケースである。このような場合、日本語では「う・よう」形式、「～する」形式の両方とも用いられ、中国語でも「吧」と動詞の無標形がともに用いられる。

(52) スープに しよう。

(52)' 要汤吧。

(53) スープに する。

(53)' 要汤。

日本語では、「スープにします。／スープをお願いします。」など、丁寧語を伴えば、言いきりの形でも、少しも失礼ではないが、中国語では「吧」がない(53)' のような答え方は、かなりぶっきらぼうで、日本語の「スープ。」という答え方にあたる。(52)' の「吧」は、語気を和らげる働きをしている。

設問（４）では、（３）と同様で、しかも改まった場面を想定した。このような場合、日本語ではどちらかというところ「う・よう」形式より、「ます」などををつけて言いきりの形にする方が普通である。

(54) 紅茶を いただきましょう。

(55) 紅茶を いただきます。／お願いします。

しかし、中国語では、改まった場面で、ぶっきらぼうな感じを避け、婉曲的に意志を伝えたいときには、必ず「吧」が用いられる。

(55)' 我要红茶吧。

日本語の場合、意志表現専用形式である「う・よう」を用いると、むしろ自分の意

志決定を表面に押し出す印象を与えるため、相手に配慮のいる場面では使いづらくなるが、中国語の「吧」は、推量用法も持つため、断定を避けて婉曲に述べる場合に適している。また、日本語では、婉曲表現を用いなくても、「いただきます」「お願いします」のように、述部に敬語を用いることによって語気を和らげることが出来るが、中国語ではそれが出来ないため、語気を和らげたいときには「吧」が必須となるのである。

設問（５）、（６）、（７）はどれも、談話に関係なく、既に決定済みの意志を表明する場合である。（５）はちょっとした日常の行動、（６）はやや大がかりな行動を想定し、（７）は重大な決意を自分から打ち明ける場合である。日本語では、どの場合も「う・よう」は用いられず、動詞性述語の無標形か、「～するつもりだ」を用いる。そのうち（５）、（６）については、両者ともほぼ同様に用いられるが、（７）については「～するつもりだ」の方がより自然である。中国語でも、やはり「吧」は用いられず（用いた場合には、推量の意味になる。）、動詞性述語の無標形か、「准备」、「要」などで表す。

設問（５）

- (56) 六時に 帰ってくるよ。
- (56)' 我六点回着。
- (57) 六時に 帰ってくるつもりだよ。
- (57)' 我准备六点回着。

設問（６）

- (58) 北海道に 行くよ。
- (58)' 我去北海道。
- (59) 北海道に 行く予定だ。
- (59)' 我准备去北海道。
- (60) 北海道に 行こうと思う。
- (60)' 我要去北海道。

設問（７）

- (61) 会社（の仕事）を やめる予定だ。
- (61)' 我准备辞掉公司的工作。
- (62) 会社（の仕事）を やめようと思う。
- (62)' 我要辞掉公司的工作。

ここで、設問（6）、（7）の例文(60)、(62)に「要」があり、設問（5）には「要」が挙がっていないが、もし、子供が例文(56)のように答えた後で、母親に、もっと早く帰るよう反対されたりした場合には、「要」を用いて、

(63) 我要六点回来。

のように答えることができる。「要」は願望を表すこともあるが、このように、強い決意や、変更しがたい予定なども表す。

4. まとめと今後の課題

以上、日本語の「う・よう」形式、「～する」形式、「～するつもりだ」形式と、中国語の意志を表す形式について、その対応関係を見てきた。次の表にその結果をまとめる。

言語	日本語	中国語
形式	① 「う・よう」	「吧」
	② 「～するつもりだ」	「要」（～しようと思う） 「打算」（～するつもりだ） 「准备」（～する予定だ）
	③ 動詞の無標形	動詞の無標形

① → 一次的モダリティ（話し手の、発話時点での主観を表す。）

② → 二次的モダリティ（話し手以外の主観をも表し、過去表現とも共起する。）

③ → 話し手を動作主体とした意志性動詞の場合のみ、発話時点での、話し手の意志モダリティを表す。

また、日本語と中国語共通の特徴として次の二点が挙げられる。

① → 談話内部での意志形成を表す。

② → 談話外部で決定された意志を表す。

以上が、日本語と中国語の意志を表すモダリティ形式の大枠として、一致している点である。

しかし、相違点もある。まず、中国語の「吧」は、「う・よう」と違って心内発話にはならない。つまり、中国語の意志表現には、聞き手の有無による表現形式の使い

分けはない。また、「う・よう」は、現代日本語の口語としては、意志専用形式であるのに対し、「吧」は文脈によって意志をも推量をも表す。そのため「う・よう」は、改まった場面では、自分を前面に出す結果となり、むしろ用い難いのであるが、「吧」は、語気を和らげたい場合には必ず必要である。

また、「～するつもりだ」に対応する二次的モダリティとして中国語の「要」「打算」「准备」を一つにくくってしまったが、調査票質問項目Vの設問(5)、(6)、(7)のところでも少し触れたように、使用に際しては意味が微妙に異なっており、更に詳しい調査が必要である。今後の課題としたい。

〈調査票〉

I. 次のそれぞれの主語が、「行く」意志をもっていることを表す文を、考えられる限り総てあげてください。

- 例：「私」・私が(は)行こう。
・私が(は)行くつもりだ。
・私が(は)行く。

「私」(話し手)

「あなた」(聞き手)

「私」+「あなた」(話し手+聞き手)(=勧誘)

「彼」(第三者)

II. Iであげたそれぞれの文について、過去のことに出来るものには○を、出来ないものには×をつけて下さい。

- 例：×私が(は)行こう。(過去表現にはならない。)
○私が(は)行くつもりだった。
×私が(は)行った。(意志の意味にはならない。)

「私」

「あなた」

「私」+「あなた」

「彼」

Ⅲ. それぞれの文に「～と思う」「～と思った」をつけてみて、言えるものには○を、言えないものには×をつけて下さい。

例：○私が（は）行こうと思った。

×私が（は）行くつもりだと思った。

×私が（は）行くと思った。

「私」

「あなた」

「私」＋「あなた」

「彼」

Ⅳ. それぞれの文に「～と言う／～と言った」をつけてみて、言えるものには○を、言えないものには×をつけて下さい。

例：○私が（は）行こうと言った。

○私が（は）行くつもりだと言った。

○私が（は）行くと言った。

「私」

「あなた」

「私」＋「あなた」

「彼」

Ⅴ. 次の場合、中国語ではどう言いますか。言える表現をすべてあげて下さい。

(1) 友達どうしのAとBが、共同で花壇を造っている。BがAに、中央には何色の花を植えるか相談した。そのときAが、

「よし、赤い花を植えよう。」

(2) Aがワープロを買おうとして、店先で友人Bと話している。Bが、こちらの方が値段は高いが、印字がずっと早いというので、Aが、

「じゃあ、こちらの方を買おう。」

(3) レストランで、セット・メニューを頼んだところ、サラダかスープか、どちらかを選ぶように言われた。そのとき、客が、

「じゃあ、スープにしよう。」

(4) 社長の家を訪問した際、応接室で、紅茶とコーヒーと、どちらが良いかと訪ねられた。そのとき、客が、

「では、紅茶をいただきます。」

(5) 母親が、遊びに行く子供に、帰宅時間を訪ねたところ、子供が、
「6時に帰ってくるよ」

(6) が、友人Bに、旅行先を尋ねられた。そのとき、Aが、
「北海道に行くよ。」

(7) Aが、友人Bに、脱サラすることを打ち明ける際、Aが、
「会社をやめるつもりだ。」

※以上、実際の調査票では、各設問ごとに解答欄を設けた。

※なお、調査項目IVで「彼」についての場合、文脈の可能性として、次の二通りがある。

①「誰かが(は)『彼が(は)行くつもりだ』と言った」という場合

②「彼が『(私が(は))行くつもりだ』と言った」という場合

ここでは、「行く」の主語が、第三人称である場合を意図しているので、①の文脈で回答して頂きたい旨を話者のお二人に説明し、御理解頂いた上で回答を得た。

(注1) 以上のニュアンスについての記述(「強い義務を表し、…」から「…余地すら残っていない」まで)は、朱継征氏の説明によるものである。張昌玉氏の説明は若干異なっているので、以下に記す。

「強い責任感を表し、どんなことがあっても自分の責任感をつらぬく姿勢」

(注2) 注1と同様に、「倫理的な理由から」という朱継征氏の説明に対し、張昌玉氏の説明は「義務的な理由から」となっており、特にニュアンスの問題では、ネイティブの両者の間で個人差が見られる。

／参考文献／

森山卓郎1990「意志のモダリティについて」(『阪大日本語研究 2』)

仁田義雄1991『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房

益岡隆志1991『モダリティの文法』くろしお出版

(とき るみえ・愛知教育大学助手)